

# 現象学的真理論の起源

——フッサールとラスクの真理概念——

西尾大樹

## 序

「ラスクの二つの著作、『哲学の論理学と範疇論』と『判断論』はそれ自身、フッサールの『論理学研究』の影響を充分明らかに示していた。このような事情が私をフッサールの著作をあらためて徹底的に研究するように仕向けたのだ」(ZD, 83)。

フッサールの現象学を継承しつつも、それを独自に展開させたハイデガーは、『イデー・I』刊行以後も『論理学研究』にこそ、現象学の意義を覩て取ろうとしていた<sup>(1)</sup>。ハイデガーが『論理学研究』のどこに注目していたのか。冒頭のハイデガーの言葉は、それを解く糸口がE・ラスクの思索にもあることを示唆している。本稿は、そのようなフッサールとラスク、両者における真理概念を検討することによって、後のハイデガーが展開した存在の思索を分析す

るための一考察にしたい。ただし、あらかじめ注意が必要なことは、一九一五年に四〇歳の若さで戦死したラスクにとってのフッサールとは、基本的には『論理学研究』（一九〇〇／〇一年）のフッサールだということである。少なくとも、本稿で扱うラスクの著書が著されたのは、『哲学の論理学と範疇論』が一九一二年、『判断論』が一九一二年といったように、『イデーニー』（一九一三年）以前のものであることを念頭に入れておく必要がある。

ハイデガーの著書であり、その存在の思索の一つの結節点と言えは無論『存在と時間』である。一九一〇年代の初期ハイデガーがその講義などでラスクを高く評価していたのは周知の事実であるが、この『存在と時間』（一九二七年）においてラスクに言及している箇所は、意外にもわずかに一箇所だけ、しかもある注においてのみである。しかし、この注は非常に興味深い。それはまさにラスクとフッサールとの関係を指摘したものだからである。第四四節「現存在、開示性と真理」におけるこの注、少し長いのでその一部をここに引用する。

「現象学的真理論についての通例の叙述は、批判的な「序説」<sup>(3)</sup>（第一巻）で説かれている事柄のみに限定され、ボルツァーノの命題論との連関を記載している。これに反して、ボルツァーノの理論とは根本的に異なる、積極的な現象学的解釈は放置されている。現象学的研究の外部で上記の考究を積極的に採用した唯一の人物はE・ラスクであって、彼の『判断論』が、明証性と真理に関する上記の数節<sup>(4)</sup>によって強く規定されているのと同様、彼の『哲学の論理学』も、第六研究（「感性的直観と範疇的直観について」）によって強く規定されている」(SZ. 218)。

ボルツァーノは、フッサールがこの『論理学研究』（第一巻）の純粹論理学を議論するなかで、「古今東西最大の論理学者の一人」(HU I. 225)と高く評価している人物であるが、そのボルツァーノに比肩できる人物として、ハイデガーはラスクの名を挙げている。この注では、ラスクの『判断論』がフッサールの明証性と真理に、そして、『哲学の論理学（と範疇論）』が『論理学研究』の第六研究と深く関わり、それらはハイデガーがいうところの「現象学的真理論」に包括される分析であることが示唆されている。

そこで本稿では、まず初めにフッサール現象学における明証性と真理の分析を整理し、それにラスクの思索が呼応するようなものであるのかを検討した上で、フッサールには見られないラスクの独自性、もしくはハイデガーを『論理学研究』へとあらためて差し向けたラスク像を描き出すことを目指したい。それは、後に「現象学的真理論」という名の下で展開されたハイデガー独自の真理論の起源を求めるとする探究の布石となるであろう。

## 一、フッサールにおける明証性と真理

明証性 (Evidenz) とは、フッサールが『論理学研究』第二巻、認識に対する現象学的解明のなかで分析しているものである。常に知覚（事物への感性的な知覚）をその分析対象の根底に置くフッサールは、それまでの議論において、知覚に対して様々な充実の段階があることを示していた。例えば、ある椅子を知覚する場合にも、それはさまざまな射映 (Abschattung) を知覚するのであり、そのような知覚は「究極的な充実」とは言えないとされる。知覚の志向的性格である現在化 (Gegenwärtigen) (現象 (Präsentieren)) は対象を「真に現在 (ein wahrhaftes Gegen-

wärtigsein) とせるのではなく、ただ単に現在するものとして現出 (ein als gegenwärtig Erscheinen) とせるにすぎない」(LU II/2. 116-117) という。そのような知覚が充実されていく様を、つまり、充実化の諸可能性を考察することによって、充実化が最後に到達すべき目標、即ち完全な志向の全体の究極的な充実、言わば充実化の最終段階が我々に示されるというのである。そのような究極的表象の直観的内実、充実の絶対的総計、直観的代表 (Repräsentant) こそが対象それ自身、ありのままの対象それ自身であるとフッサールは言う (Vgl. LU II/2. 117-118)。

そこからさらにフッサールは、「表象志向がこのような理想的に完全な知覚によって究極的に充実された場合に、ものと知性ととの真の一致 (Die echte adaequatio rei et intellectus) が成立したことになる」(LU II/2. 118) としようように議論を展開する。つまり、古代アリストテレス以来自明とされていた「知性と事物の一致 (adaequatio intellectus et rei)」について、フッサールは、そのような場合の知性 (intellectus) とは思想的な志向、もしくは意味の志向のことであると、ここで、「思想 (Gedanken)」と《事象 (Sache)》との一致の完全性を二重の完全性だと言って注意を促す。つまり、直観との適合という意味での完全性と、この完全性を前提とする究極的な充実化 (《事象そのもの》との一致) の完全性の区別をしなければならないというのである。そして、その後者の充実化、つまり事象そのものとの一致という充実化をフッサールは明証性という概念で表わそうとするのである。「明証性それ自身は、あの最も完全な合致綜合 (Deckungssynthesis) の作用である」(LU II/2. 122)。そして、そのような完全に一致する作用における客観の側の相関者を真理という意味での存在と呼びうるとして、フッサールは「明証性の概念以外のものには真理という術語を与えたくはない」(LU II/2. 122) とまで言うことになる。ただし、フッサール

ルはここで明証性と深く関わる真理概念に四つの規定を用意しているのだが、重要なものは次の二つである。すなわち、

① 真理とは「思念されているもの (Gemeintes) と与えられているもの (Gegebenes) それ自身との完全な一致である」(LU II/2. 122) というもの。しかし、そこから、明証性が真理の《体験》であると単純に結論を導いてはならないとフッサールは言う。「明証性が真理の十全的な知覚である」などと解釈してはならず、事象そのものの同一化は、同一化自身の客観化的統握の作用によって、つまり、存在する真理を自ら凝視 (Hinblick) することによって、初めてそのような顕在的知覚になるというのである (Vgl. LU II/2. 122)。ここでは「実際、真理は《存在している (vorhanden) 》」(LU II/2. 123) という分析も導かれる。つまり、第一の真理概念は明証性の作用に対応する対象的な真理である。

② もう一つの真理として、フッサールは、「志向の正当性 (とりわけ例えば判断の正当性) としての、換言すれば志向と真の対象との一致としての真理、ないしは志向のスペチエス的な認識的本質の正当性としての真理」(LU II/2. 123) というものを挙げている。

しかし、フッサールは注意すべき点として、この①の意味での存在 (Sein) と、《肯定的》定言言表の繫辞の存在 (Sein der Kopula) とを混同してはならないと言う。「判断の真理という意味での存在は体験されてはいるが、しかし表現されてはおらず、したがって言表の《である (ist) 》によって思念され、体験されている存在とは決して一致

しない」(LU II/2. 124)。つまり、明証性においては全面的な合致が重要となるのに対して、この繫辞の〈Sein〉では部分的な同一化(即ち性質判断)だけ可能になるため、明証性における全面的な合致との明確な区別が必要だといっているのである。これをフッサールは別の言い方で、「主語と述語の一致」と「明証性の作用の総合的形式を形成する一致、すなわち言表の意味志向と事態そのものの知覚との間で徐々に形成される全面的な合致」が別物であり、区別しなければならない、と述べている。

以上がフッサールにおける明証性と真理に関する大まかな分析である。(感性的)直観との適合という意味での完全性と、《事象そのもの》との一致の完全性との区別を求め、事象そのものとの一致という充実化を明証性という概念で表わそうとしたフッサール、さらに、その明証性に真理という術語を与えたものの、明証性の作用に対応する対象的な真理と、志向と真の対象との一致としての真理といった具合にここにも再び、一つの区別を要求したフッサール、そして、繫辞の存在(Sein der Kopula)が明証性となる真理への導き手になりえないものであるかのような指摘をなしたフッサール、それらがラスクの思索にいかなる影響を及ぼしているのだろうか。すなわち、明証性と真理に関する分析がいかなる意味でラスクの『判断論』を規定したと言えるのであろうか。

## 二、ラスクの「哲学の論理学」と「判断論」

その早世によって完成をみることはなかったが、ラスクは彼独自の「哲学の論理学」の構築を目指していた。その

ためのプログラムであったのが『哲学の論理学と範疇論』（一九一一年）であり、翌年に公刊された『判断論』を、彼は、その『哲学の論理学と範疇論』への「主張に対する足場」(EL. 248)であると位置付けている。より詳細には、彼は自身の「判断論」を「理論哲学の根本概念と関連させ、判断の領域を超越論理的原構造において量ることによって、論理学の全連関における、その絶対的な位置を規定すること」(EL. 250)であるとしている。そのような独自の展開を可能にしたのがフッサールからの影響だということを、ラスク自身も認めている。「論理的判断論はほとんど全く作用から解放し得る〈意味〉の構造のみを論じるものである。フッサールによって、現代の研究に意識されるようになったこの見解こそ、この論文において主張される判断論の根底をなすものに他ならない」(EL. 254)と。それゆえに、ラスクは「判断の構造の理論は、また判断の〈意味〉(Sinn)の理論と名付けることも出来る」(EL. 253)としている。

このような「判断論」を構想するラスクは、もともと新カント学派に属する思索家であった。無論、彼もカントのコペルニクス的転回の意義を強調するのだが、その評価する点が、他の新カント学派の人々とは少し異なっていた。彼はカントのこの功績によって「理論的なものそのものが、哲学の全場面において全く異なった位置を占めるようになった」(EL. 249)と言う。理論的なもの、対象に対する単なる相関者という位置に甘んじていたもの、そして、かつては論理の背後へ (*ins Metalogische*) 埋没するかのように見なされていた一つの全く新しい区域が、論理学の活動範囲として開拓されたというのである。そのような論理学は「対象的理論的意義ならびに非対象的理論的意義の問題圏を包括できる」(EL. 249)ものであるとラスクは言う。ラスクが求めたこのような論理学は、従来の論理学とは幾分趣を異にするものである。それは彼の内発的な衝動から推測することができよう。

ラスクは、『哲学の論理学と範疇論』の後半において、「哲学的認識」という章を、そしてその中に「生と認識」という一節を設けて次のように語っている。

「一方において、〈生きること〉(Leben)と〈思索すること〉(Spekulation)とが別物であることがはっきり言い表されているのと同時に、他方においては、しかしなお、〈思索すること〉は何らかの仕方で〈生きること〉の範域から取り出された質料の上に築き上げられていることも言い表されている」(EL. 159)。

つまり、ラスクの目指した「哲学の論理学」とは、この「生きること」と「思索すること」の関係を扱うものであった。ラスクは、「直接的体験は、非感性的なもの(Nichtsinnliches)における単なる〈生〉であり、自己喪失(Sichverlieren)である。それ故、まさに非認識であり、非知識的で、非反省的な、その限り素朴的な、何らの〈思想〉や明晰性によって錯乱されていない態度である。自己が〈行い〉、あるいは〈生きている〉ところのものそのものを知らない体験である」(EL. 159)という。ラスクは、日常の生活を「単なる生」と見なし、それを「非認識」として敬遠している。そのような「非認識」ではない「生」を目指して、ラスクは「哲学の論理学」を求めたのである。それゆえ、彼は従来の論理学の活動範囲を逸脱できる方途を求めたのであり、それがまさにフッサールから着想を得た彼の「判断論」であったと言えよう。



### 三、ラスクの真理論

そもそも、フッサールの『論理学研究』は、その第二巻の副題が「認識の現象学と認識論のための諸研究」であったことから明らかなように、従来とは異なった新たな認識論の構築が企図されたものであった。ラスクの思索も、そのようなフッサールの新たな認識論の展開の延長線上で理解することが出来る。

ラスクにとって、認識することは論理的に限定すること、つまり、経験において感覚的に与えられる論理的に裸な (logisch nackt) 質料を、論理的な構造をもっている範疇的な述語で限定することであった。認識する主観は、常に対象を歪曲し、妥当するものは、主観に対しては規範としてのみ現れることになる。これらは判断作用の中で成立するため、判断における主語と述語の結合は、「然り」(Ja) という場合は「正しい」(richtig)、「否」(Nein) という場合は「偽」(falsch) であるにすぎず、「真」(wahr) とは言えなくなる。そのため、真理は、アリストテレスにおける「知性と事物との一致」と言われるような判断に拠ったものではなく、質料が形式によって規定されているということが、それ以上遡及不可能な真理であるとラスクは考えた。ラスクはしかし、既存のアリストテレス真理観を無視したわけではない。「真と偽の対立のへ必然的「二重性」への洞察に対する萌芽は恐らく、その後のすべての時代を支配している判断論、つまりアリストテレスの判断論においてすでに見出されるであろう」(EL. 265) としながらも、「アリストテレスにおいては、二つの真理概念を区別しておかねばならない。即ち、無対立的真理、事象性的真理、そして最後に、判断陳述の真理である」(EL. 396) として、フッサール同様、アリストテレスの真理概念をさ

らに吟味しようとするのである。そのような分析に拠って、形式に規定される質料というものをより一層考察しているとしたのが彼の論理学であった。

この過程でラスクは、フッサールにおいて区別を促されていた繫辞 (Kopula) に対して、そして、フッサールにおいては「繫辞の〈Sein〉は部分的な同一化 (即ち性質判断) のみに対応している」と、いくらか軽んじられていた繫辞に対して、逆にその重要性を強調している。「関係の究極的要素は主語と述語であり、その中立的な関係性、即ちそれらを結びつけるつなぎ手が繫辞 (Kopula) なのである」(EL. 272) とし、さらに「アリストテレスの暗示に結びついたスコラ哲学的用語法に従えば、諸々の要素を一つのまとまった統一に結合する繫辞的契機は〈形式〉と呼ばれ、連結して存立している要素は〈質料〉と呼ばれる。故に、判断客観の〈形式〉は中立的なものとしてではなく、対立的に区別されたものと見なされるべきである」(EL. 273) と言う。つまり、ラスクは自らの論理学にとって課題となる、形式と質料の関係を解き明かす鍵として、繫辞に期待を寄せているのである。

これはフッサールとの立場の微妙な相違が見られる点であろう。ラスクはこう述べている。「我々は認識の間接性を次のように曲解してはならない、——感性的体験に向けられた認識は何と言ってもただこの感性的体験の単なる再現的体験に過ぎず、この体験そのものであることはどうあっても不可能である」(EL. 72)。

フッサールも確かに、様々な知覚が「究極的な充実」になりえないことは認めていた。だが、フッサールは、そのような知覚が充実されていく様を考察することによって、ありのままの対象それ自身が示されるはずであると言い、そのような考察のなかで彼の明証性の分析、そしてひいては真理概念が展開されていたのである。しかし、ラスクの場合はどうであろうか。このラスクの言葉は、あきらかに、感性的体験の認識 (つまり、フッサールの言葉で言うところ

ころの、感性的直観への反省)を軽んじているかのような言葉である。何故そうなのか。ここにフッサールとは幾分異なる、ラスクの真理論を垣間見ることが出来る。ラスクは次のように述べている。

「これまでの論理学者たちが〈事象そのもの〉の諸代表 (Repräsentanten) として、つまり考察の対象として、この現実性を事例として引き合いに出すのならば、反省的形式はある意味〈事象的意義を欠く〉ものであることは疑いもない。反省的形式は決して現実性そのものに到達 (erreichen) しないし、的中 (treffen) もしない。この論理的形式はただ単に、主観性において初めて発生するある反省的規定を与えるのみであつて、この規定では事象そのものについては何も予感されないのである。しかしながら、この時、謝絶されたままの事象そのものとはそもそも何であろうか。それはまさに、この根源的構成的体制における真理の王国以外の何者でもない！」(EL. 120)。

ラスクとフッサール、それぞれにとっての真理概念が、実は異なったものであることがこの一文からも明らかであろう。フッサールにとって、事象そのものへの接近の方途はあくまでも感性的直観に基づけられたものであり、感性的直観に基づけられた上での充実化によって明証性へと、即ち真理への方途も開かれたのである。しかし、ラスクの真理はこれとは明らかに異なる。ラスクに言わせれば、フッサールが考察の対象としてきた現実性、つまり事象そのものに対する反省的形式は、決して事象そのものに辿り着くことは出来ず、事象そのものは謝絶されたままであるという。そして、まさにその謝絶された事象そのものこそが、この根源的構成的体制における真理の王国であると、ラ

スクは言うのである。後に現象学の格率として有名になる「事象そのものへ！」(Zu den Sachen selbst) という場合の事象そのものが、この場合、フッサールとラスク、両者の間では全く異なっていると見えよう。「反省的形式は、主観性のなかに閉じ込められていて事象そのものには到達しない。それゆえ、一方の範疇の形式層は、他方の層を的確に捉えることはできない」(EL. 121) との言葉は、ラスクによるフッサールへの反論と受けとることができ

る。実際、ラスクは『判断論』の最終章において、主観・客観関係を議論の俎上に載せるべきであり、その任を「意味の論理学」が担うものである、といった具合に、フッサールとは距離を置いた議論を展開することになる (Vgl. EL. 351)。彼は自身の目指す論理学によって「主観性が対象領域と相並ぶへ意味」の新領域に対する主導者 (Urheber) となる」(EL. 353) とし、その課題をこう述べている。「体験の事実性のなかで意味が見出されるのであるから、理論哲学には二つの大きな研究領域が生じる。つまり、まず一つ目に意味の構造と、範疇的形式内実を解明すること。しかし、二つ目には理論的意味の実現場所、意味に対する主観的態度が問題にされねばならない」(EL. 358) と。

前節において紹介したラスクのフッサール評価の言葉、「論理的判断論はほとんど全く作用から解放し得るへ意味」の構造のみを論じるものである。フッサールによって、現代の研究に意識されるようになったこの見解こそ、この論文において主張される判断論の根底をなすものに他ならぬ」(EL. 254) やら、「判断の構造の理論は、また判断のへ意味」の理論と名付けることも出来る」(EL. 253) とする言葉、これらの言葉は、フッサールへの無批判な賛同ではないことがここにきて明らかになる。

ラスクは、とりわけ、ボルツァーノやフッサールの展開した論理学の歴史的意義が、「意味を—命題へ自体」を—

実在的基体から分離可能にしたこと」として評価しつつも (Vgl. EL. 360) それに満足するのではなく、さらにこの場合の意味、即ちラスクの言う「真理」の「被触性」(Angestastetheit) についての分析、並びにそこから帰結する原対象的・無対立的な「意味」の概念へのさらなる探究がフッサールやボルツァーノにおいては為されていないことを批判しているのである。「フッサールにおける観念的陳述意義の〈自体〉(Das «Ansich») は、徹頭徹尾、擬超越性 (Quasitranszendenz) の域を脱していない。主観性から逃避しようとする努力をしているにも関わらず、それでもなお、強く主観性のもとにある」(EL. 360) と。

それ故に、ラスクの論理学は、フッサールとはまた別様な論理学となる。それが、ひいては繫辞という存在概念に注目した論理学なのである。「存在認識は単なる感性的体験より、より以上のものである。認識の際にはまさしく〈へについて〉および〈へに関して〉が、つまりこの念入り (Umständlichkeit) がなければならぬ。換言すれば、捕獲する形式と捕獲される質料との二元性が、しかも、まさしく〈へについての真理〉が、即ち理論的意味の分裂性がなければならぬ。これらの全ては、ただただ体験するのみであるところの単なる感官生活に際しては顕れては来ない、即ち、体験が全く意義無関与のものにのみ没頭し、決してそれを超えてそれについての真理および明晰性 (Klarheit) に達しないところには顕れない。よく人が言うような、ただ〈へ直接に〉体験されたところには顕れない。したがって、これとは反対に、認識はより以上のものである。というのも、体験の上になおそれについての明晰性が付け加わるからである」(EL. 72)。

以上のように、ラスクの論理学は、フッサールの影響が確認されながらも、しかし、やはり彼独自の論理学だったのである。だが、ラスクの真理概念、そして、そのなかで生じてきた存在概念の分析が皮肉にも、ハイデガーをフツ

サールの『論理学研究』へあらためて連れ戻したと言えるのではなからうか。最後に、このことを検討しておきたい。

#### 四、現象学的真理論の起源―生・真理・存在―

『存在と時間』が公刊される二年前、一九二五年夏学期講義『時間概念の歴史への序説』において、ハイデガーはフッサールの現象学が三つの決定的な発見を為したと評価している。すなわち、志向性、範疇的直観、アプリアリの根源的な意味、この三つの発見である (Vgl. GA 20. 34)。なかでも特に重要と考えられたのは二つ目の範疇的直観である。後年、それは「ハイデガーにとつての本質的な原動力となった、フッサールの決定的な寄与」(GA 15. 377)と回想されることになる。範疇的直観がいかなる意味において、「本質的な原動力」となりえたのか。それを詳細に議論することはここでは控えるが、少なくともそれがハイデガーの存在の思索に大きく関わっていることだけは指摘しておきたい。その上で、本稿の初めに引用した、『存在と時間』におけるあの一節を思い出したい。「現象学的研究の外部で上記の考究を積極的に採用した唯一の人物はE・ラスクであつて、彼の『判断論』が、明証性と真理に関する上記の数節によつて強く規定されているのと同様、彼の『哲学の論理学』も、第六研究(「感性的直観と範疇的直観について」)によつて強く規定されている」(SZ. 218)。ラスクの『判断論』がフッサールの明証性と真理の分析に影響されているというだけではなく、『哲学の論理学と範疇論』自体が『論理学研究』の第六研究、即ち範疇的直観と深く関わっているとの示唆は、ここで、より説得力を持つて確認することができよう。

何故、ハイデガーはラスクによって、『論理学研究』をあらためて研究するようになったのか。ラスクの何が、フッサールへの「再接近」をハイデガーに促したのか。それは、これまでみてきたラスクの真理論がフッサールとは幾分異なる真理論であり、しかも、それが、ラスクの求めた「哲学の論理学」において「意味の論理学」として展開されてきたからではなからうか。それはハイデガーが求めていたものとも重なっていたのではなからうか。

「事実性の解釈学」とは、ハイデガーが「存在の意味への問い」もしくは「基礎的存在論」を展開することになる以前の、一九二三年夏学期に行われた講義<sup>(5)</sup>の副題ではあるが、ハイデガーが一九一〇年代から、「生の事実性」(もしくは「事実的な生」)を常にその哲学的探究の対象にしていたことは周知の事実である<sup>(6)</sup>。ハイデガーはラスクを「現象学への途上にあつたが、現象学の根本動機を取り上げることにはなかつた」と評しているが (Vgl. GA 56/57. 177)、この言葉には、ラスクがハイデガーの存在の思索に深く関わつたであろうことと同時に、おそらくハイデガーが囑望していた生の哲学を、つまり「生の事実性」をラスクの「哲学の論理学」では汲み取りきれなかつたということも示唆されているのではなからうか。ラスクの「哲学の論理学」も「生の事実性」を求めたであろうことは、本稿のこれまでの分析からも異論の余地はなからう。厳密学としての哲学を標榜したフッサールは、そもそもそのような「生の事実性」を求める態度が稀薄であつたことは否めない。ラスクが「生の事実性」を捉えることに成功したのかは大いに疑問であり、ひいては、ハイデガーでさえ、そのことには疑問符がうたれるであろう。しかしながら、ラスクの著作に、フッサール現象学の新たな可能性をハイデガーが見てとつたことは明らかであろう。それは、ラスクの次のような一節にも観て取ることができる。

「認識は捕獲された質料においてではなく、範疇のなかでのみ直接に生きているのである。これに反して、質料の

中においてはただ間接的に、そして範疇を通して、生きていくに過ぎない。認識は、感性的質料を知識という目的のためにのみ眼前に据え置くに過ぎないが、決してその中で直接に「生きる」ためではなく、ただひたすらそれについての真理を把握しようとするのである。認識はただ真理の中のみ、即ち理論的意味のなかにのみ「生きていく」(FL. 73)。

## 結 語

本稿では、ラスクとフッサール両者の思索に対して、それぞれの真理概念をもとにした分析を試みてきた。それによつて、「ラスクがフッサールの影響下にあつた」とのハイデガーの指摘をいくらか確認することはできたであろう。しかし、それにもまして、「ハイデガーを『論理学研究』へと向かわせたラスク」の姿がより鮮明に浮かび上がつてこようとしているのではなからうか。フッサールに直接師事する一九一六年以前から『論理学研究』を熟読していたハイデガーは、当時を振り返り、「私の努力は徒勞であつた。というのも、∴私は正しい仕方では求めていなかったのだから」(ZD. 82)と述懐している。『論理学研究』に魅せられていながらも、「一体何が私を魅了したのかを十分に洞察することなしに、数年間、常に繰り返しその著作を読み耽つていた」(ZD. 82)状態だつたハイデガーの目を開かせたのは、ラスクだつたのである。それはハイデガーを独自の現象学へと、つまり、現象学的真理論や生(ハ イデガーの言葉では事実性)の哲学へと、そして存在の思索へと導くものでもあつたと言えよう。

「現象学的真理論」という名を冠した独自の真理論を展開したのは他でもないハイデガー自身である。現存在の実



存論的分析論において展開された彼の真理論が、師のフッサールやラスクとは、また異なったものとなったであろうことは想像に難くない。しかし、ハイデガーの「現象学的真理論」には、確かにフッサールのみならず、ラスクの真理論も深く根ざしているであろうことが、本稿の分析から容易に推測することができるのではなからうか。フッサールとラスク、両者の真理論概念はハイデガーによって、いかなる真理論へと展開されたのか。さらには、それがハイデガーにとっていかなる形で存在の思索へと結実していったのか。その更なる分析は次の課題としたい。

## 注

- (1) ハイデガー自身、一九二五年のカッセル講演において『論理学研究』は現象学の真の基本書 (das eigentliche Grundbuch) である」と述べている。(Dilthey-Jahrbuch für Philosophie und Geschichte der Geisteswissenschaften, Bd 8/ 1992-93, Vandenhoeck & Ruprecht in Göttingen. S. 160)
- (2) ハイデガーは、その講義のなかで「エミール・ラスクの研究に私個人は負うところが大きい。……彼は現代においても最も強烈な哲学的人物のひとりであり、重みのある人であった。彼は現象学への途上にあつたと私は確信している」(GA 56/57. 180) と述べている。
- (3) これは正式には「純粹論理学序説」、つまりフッサールの『論理学研究』第一巻 純粹論理学序説を指している。
- (4) 具体的には『論理学研究』第二巻 第一編 第五章 理想的な一致。明証性と真理 の数節を指している。
- (5) 正式なタイトルは「存在論—事実性の解釈学」である。
- (6) ハイデガーは一九一九年講義「哲学の理念と世界観問題」において「隔—生化 (Ent-lebung)」によって損なわれない、生の探究への意欲を示している (GA 56/57. 91)。

## 文献

※引用の際には、文中において以下の略号に頁数をあてて示した。なお、翻訳に際して、フッサールの『論理学研究』は立松

弘孝訳（みすず書房 1968, 1976）を、ラスクの『哲学の論理学ならびに範疇論』と『判断論』は久保虎賀壽訳（岩波書店 1930, 1929）を参考にさせてもらったが、筆者（西尾）があらためて訳しなおしたものもある。特にラスクの著作における彼の用語は筆者自身による訳語である場合がある。また、太字による強調も筆者によるものである。

Martin Heidegger (1889-1976)

SZ : *Sein und Zeit*, Max Niemeyer Verlag Tübingen, 17. Auflage, 1993.

ZD : *Zur Sache des Denkens*, Max Niemeyer Verlag Tübingen, 1969.

※*Gesamtausgabe*, Vittorio Klostermann. Frankfurt am Main. 以下、巻数とタイトルと発行年数のみを記した。

GA 12 : *Unterwegs zur Sprache*, Gesamtausgabe. Bd. 12, 1985.

GA 20 : *Plolegomena zur Geschichte des Zeitbegriffs*, Gesamtausgabe. Bd. 20, 1979.

GA 56/57 : *Zur Bestimmung der Philosophie*, Gesamtausgabe. Bd. 56/57, 1987.

Emil Lask (1875-1915)

EL : *Die Logik der Philosophie und die Kategorienlehre, Die Lehre vom Urteil*, Dietrich Schlegelmann Reprintverlag, 2003.

Edmund Husserl (1859-1938)

LU I : *Logische Untersuchungen, Erster Band*, Max Niemeyer Verlag Tübingen, 1993.

LU II/2 : *Logische Untersuchungen, Zweiter Band*, Max Niemeyer Verlag Tübingen, 1993.

(大学院研究員)